

## 「社会科巡検」報告



## 社会科巡検報告

### 1日目

- 9:00 秋大出発
- 11:00 田沢湖到着・昼食（バイキング）
- 13:00 田沢湖郷土史料館到着・見学
- 14:20 田沢湖郷土史料館出発
- 15:00 田沢湖たつこ茶屋にて三浦久さんからクニマスのお話を聞く
- 16:30 たつこ茶屋出発
- 18:00 奥羽山荘到着

### 2日目

- 9:30 奥羽山荘出発
- 11:50 天鷲村到着・昼食
- 12:30 体験開始（ぜんまい織・きりたんぼづくり）
- 15:30 天鷲村出発
- 15:35 妙慶寺到着・見学
- 16:30 妙慶寺出発
- 17:30 秋大解散

### 参加者（敬称略）

【教授】井門正美・外池智

【院生】鮎川博晃

【学部生】泉大地・大森果歩・菊池遼太郎・小室早弥花・佐々木弘平・高橋美咲・  
中嶋俊平・譲矢有紀・伊藤千瑛

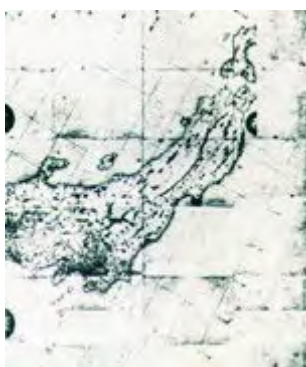
## シーボルト事件について（高橋美咲）



### ○シーボルト事件

1828年（文政11）9月、オランダ商館付医官シーボルトが任期を終えて帰国しようとした際に、たまたま起こった暴風雨のために乗船が難破し、積荷が調べられた。そのオランダへ持ち帰る荷物の中に伊能忠敬作成の日本地図など多くの禁制品のあることが発覚して事件が起こった。取り調べは江戸と長崎で行われて長引き、シーボルトはおよそ1年間出島に拘禁され、29年9月25日「日本御構（おかまえ）」（追放）の判決を受け、同年12月日本より追放された。

### ○事件の発端となった日本地図



高橋景保から禁制品である「伊能図」を見せられたシーボルトは、その写しを許可された。実は後のシーボルト事件は禁制品であるこの写しを持ち出したことにあった。

彼は、著作の中で、「私は城番の家来を買収して将軍の御殿の良い見取り図を手に入れることに成功した。」と述べている。

\*詳しくは高橋が最終版伊能図「大日本沿海輿地全図」の縮図をシーボルトに贈り、その写しをシーボルトが持ち出した。

### ○この事件に連座した日本人

(江戸) 書物奉行兼天文方：高橋作左衛門景保，奥医師：土生玄碩・長崎屋源右衛門  
(長崎) 門人：二宮敬作・高良齊，出島絵師：川原登与助，

通詞：馬場為八郎・吉雄忠次郎・稲部市五郎・堀儀左衛門・末永甚左衛門・・・  
など、五十数人の多数に上った。

○馬場為八郎について

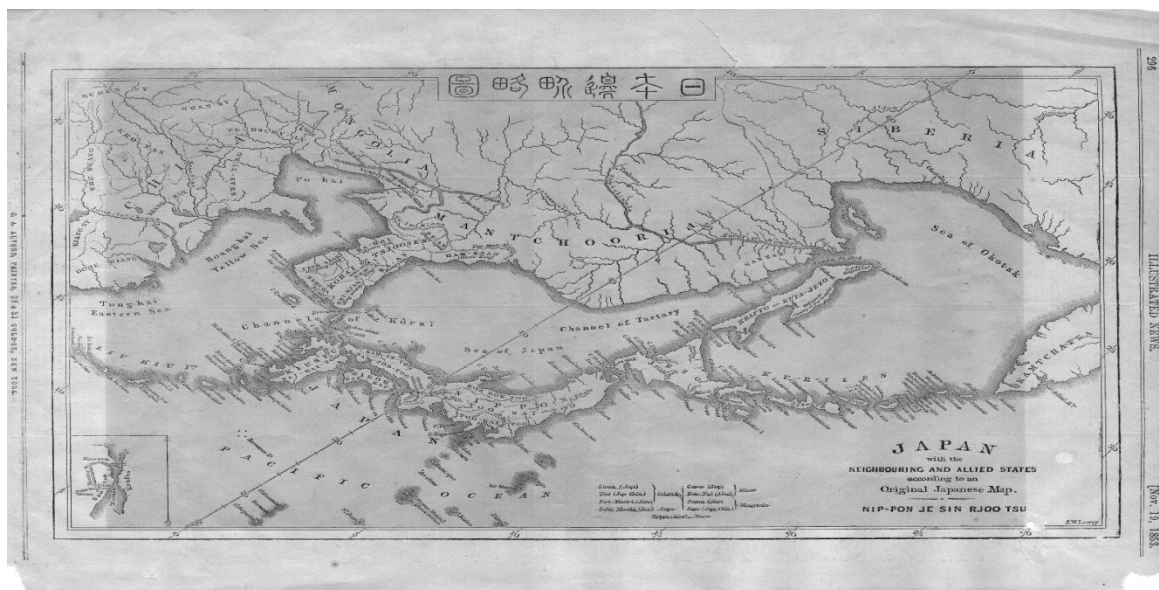
長崎生まれの江戸後期活躍したオランダ語通詞。(レザーノフ「日本滞在日記」に記述有)

1815年「諸厄利亜語林大成」(日本初英和对訳辞書)編集に協力。

シーボルト事件に連座した罪で永牢を申し渡され、出羽亀田藩主岩城伊代守に預けられ、  
ここ(秋田県由利本荘市)で生涯を閉じる。(↓秋田県由利本荘市天鷲村)



○シーボルト著「日本」の中の日本全図



## クニマス（大森果歩・佐々木弘平・鈴木雅翔）

### （1）クニマスとは（大森果歩）

クニマスはもともと秋田県の田沢湖にだけ生息する固有の淡水魚。かつて「国鱒（くにます）一匹、米一升」と言われたほどの高級魚だった。田沢湖町観光協会によると、クニマス漁の記録は江戸時代から残り、1935年には約8万8千匹の漁獲高があったという。しかし、40年以降、発電などのための導水工事で田沢湖に酸性の水が入り、まもなく姿を消した。同協会が95～98年、最高500万円の賞金つきで生き残りを探したが見つからず、死滅したと考えられていた。しかし、2010年12月、京都大学の中坊徹次教授らのグループの調査で日本固有の魚クニマスが富士五湖のひとつ、西湖（山梨県）で約70年ぶりに生息が確認された。国のレッドリストで絶滅種に指定された魚が再発見されたのは初めてである。

### （2）三浦久さんのお話（佐々木弘平）

田沢湖のクニマスについて調べるにあたって、クニマスの「里帰りプロジェクト」に参加している、三浦久さんに話を伺いに行った。まず現在行われているクニマス里帰りプロジェクトは、難航しているという。まずクニマスを田沢湖に戻すために、田沢湖の水質をクニマスが生息できる状態に戻さなければならない。田沢湖は現在、玉川温泉からも水が導入されてしまっているため、酸性の状態となってしまう。そこで現在は中和処理施設を設置して年間2億4000万円を使用し、石灰を田沢湖に導入し、田沢湖の水質の中和をしようとしている。しかし現在魚はウグイしかいないという。三浦久さんはこれにより余計に悪くなってしまったのではないかと言っていた。ではどういったことが原因で、このようなことが起きたのか、どのような経過を経て、クニマスが発見されたのかをクニマスの歴史を踏まえながら教えてくれた。

クニマスは明治時代、田沢湖で漁をして生活していたものにとって重要な収入源であったという。クニマスを捕るためのほりは漁師ごとに所有権が決まっており、当時のほりの所有権を示した証明書などもいくつか現存しており、とても大切なものであった。明治42年にはクニマスの養殖、ふ化事業が始まった。しかしエサが分からないなどが原因で10年間うまくいかなかった。しかしある程度育てた卵を湖に放流することでうまくいくということが分かり、それからはうまくいくようになった。そのときに、「組合の発展のために、組合の事業として卵の分譲を認めてほしい」と依頼され、卵を山梨県の西湖、本栖湖へ分譲し、他にも琵琶湖や長野県、富山県にも分譲したという。昭和10年3月29日西湖に卵を送ったという記録が残っている。

ではなぜ田沢湖にクニマスが生息することができなくなったのか。それは昭和に太平洋戦争に向かって行われた、田沢湖開発が大きな原因であると教えてくれた。この開発では、玉川系発電計画と国営田沢疎水開拓が行われた。この開発のために漁ができなくなった漁師のために、漁業補償が行われ、昭和13年には6万8000円の補償額が支払われた、これは漁師一人に1000円くらいという振り分けで、当時で米7,80俵程度であったという。田

沢湖の工事は昭和12年9月に着手し、昭和13年2月に本格的にスタートした。クニマスの絶滅の心配はないという記事もあったが、1940年以降、田沢湖の足りなくなった水を補填するために、玉川から流れる水をひくことになってしまった。他にも1.4mも水位が下がり、岸が壊れるなどの被害が生じてしまうなど、いい加減な記事であったと三浦さんはいっていた。昭和24年8月に第二次漁業補償が行われ、195万円が支払われる。これは一人3万円程度振り当てられるものであったが漁業権を譲渡しなければならず、その時点で田沢湖の漁業の終焉となってしまった。その後クニマスの姿は見えなくなってしまったという。

三浦久さんの父親はクニマスを探すための活動に従事していたという。しかしなかなかうまくいくということではなかった。しかし昭和61年にクニマスに似た魚がいるという報告があった。昭和63年に再び本格的にクニマス探しに着手した。その後平成9年にはクニマス探しのキャンペーンとして「クニマスを見つけたら1500万円」という事業を始めた。それにより、14個体送られたが、どれもクニマスではなく、結局発見することはできなかった。その後クニマス探しは難航し、見つけることはできなかった。

しかし平成22年12月15日、朝日新聞で「クニマス生きていた」という記事が出た。きっかけは、京都大学教授の中坊徹次がタレント・イラストレーターで東京海洋大学客員准教授のさかなクンにクニマスのイラスト執筆を依頼したことであった。さかなクンはイラストの参考のために日本全国から近縁種の「ヒメマス」を取り寄せた。このとき、西湖から届いたものの中にクニマスに似た特徴をもつ個体があったため、さかなクンは中坊に「クニマスではないか」としてこの個体を見せ、中坊の研究グループは解剖や遺伝子解析を行なった。その結果、西湖の個体はクニマスであることが判明したとし、根拠となる学術論文の出版を待たずして、12月15日にマスコミを通して公式に発表された。1935年、田沢湖から西湖に送られたクニマスの受精卵10万個を孵化後放流したものが、繁殖を繰り返して現在に至ったと考えられている。

三浦久さんが言うには、西湖には1万匹くらいはクニマスが生息しており、本栖湖にはヒメマスとクニマスのDNAが混ざったものが生息しているのではないかと言っている。クニマスを田沢湖に戻すためには田沢湖の環境をクニマスの棲めるものに戻さなければならないが、70年前の田沢湖と現在の田沢湖は水位変動により岸が崩れてしまうなど大きく違っているという。三浦さん曰く、水力発電は、エネルギーを生み出す過程にはクリーンな発電であるがその施設の設置のためには自然に対する負荷が大きいという。将来風力発電が主流になるのではないかとということである。

現在中和施設により水質を変えようとしているが、玉川の水が流れる限り、それは難しいということだ。しかしクローン技術でニジマスなどにクニマスを産ませるなどといったことは可能であるという。そのようなことを含め、田沢湖の環境をもとに戻しクニマスを田沢湖に戻すために様々な活動をしている。現在は「田沢湖に命を育む会」を発足し、三浦久さん自身も参加し、現在80人程度で活動し、田沢湖にクニマスに戻すために努力して

いる。

### (3) 田沢湖郷土資料館 (鈴木雅翔)

田沢湖郷土資料館では、今は失われてしまった田沢湖の漁の資料や、貴重なクニマス(標本)をはじめ、市内遺跡から出土した多くの石器類を見ることができます。標本は、世界に17体しか残されておらず、県内には5体のクニマスの標本があり、田沢湖郷土資料館にはその内の貴重な2体が展示されています。その他にも、玉川マタギが実際に使っていた衣装や、国指定重要有形民俗文化財に指定されている田沢湖のまるきぶねなどが展示されており、先人の遺業や、クニマスが辿った歴史について触れることができます。

### ぜんまい織 (伊藤千瑛)

#### ・ぜんまい織とは

ぜんまい織とはぜんまい綿を絹と混合し緯糸(よこいと)にし、経糸(たていと)には絹糸を用いて織り上げたものである。ぜんまい綿というのは山間に自生しているゼンマイを採り、食用の茎と織物に用いる冠毛とに分けて下処理の後、天日で乾燥させたものである。ぜんまい綿は水をはじき、羊毛にも似た柔らかさで独特の自然色を持っている。そして、ぜんまいの綿毛には防虫防カビ効果を持ち優れている。

#### ・ぜんまい織ができるまで

- 5月初旬    ぜんまい採りが始まる。食用になる茎と織物に用いる冠毛とに分けられる。そして、「雌」のぜんまいの冠毛(綿)についているゴミを手で取り除き、「日陰」でよく乾燥させる。
- 8月初旬    乾燥させた冠毛を90度程度で蒸し、乾燥させた後、真綿と混合し綿状にする。糸車を用いて手作業で綿より糸を紡ぐ。染色には化学染料を一切使用せず、すべて自然の植物を使って染め上げる。

最後に、経糸は絹を用い、緯糸には真綿の手紡ぎ糸を使用し、緯糸の真綿にはぜんまいの綿毛や水鳥の羽毛が一緒に紡がれている。



ぜんまい採り



ぜんまいの綿を天日で干す



糸車を用いて手作業で綿より糸を紡ぐとき、同じ太さの糸にする作業だけでも習得に数年かかると言われている。私たちが体験させていただいた天鷲村にはげんざい二人の伝統工芸士がこの伝統を受け継いでいる。

・天鷲ぜんまい織について

天鷲ぜんまい織の歴史は1802年に岩城町から始まる。岩城藩主が財政の立て直しと殖産のため、領民に普及させたのが初めとされている。現在の形にちかい「天鷲ぜんまい白鳥織」の名で明治初期に考案された天鷲ぜんまい織の原料には、ぜんまいの綿毛や水鳥の羽毛、真綿などが使われていた。現在もすべてが手作業で、手機（てばた）による手織りである。着尺一反を織り上げるのに二カ月くらいかかると言われている。

左下写真は実際に私たちが作ったものではないが、同じ材料で職人さんが作ったものを頂いたぜんまい織である。写真以外にも様々な色あいや柄のパターンがあって、面白いものばかりであった。体験してみて仕組み自体は簡単であったが、ぜんまい織を織る力加減がとても難しかった。





### 天鷲村できりたんぼ作り（小室早弥花）

天鷲村で、きりたんぼ作りを体験した。きりたんぼは秋田県の郷土料理の一つであり、天鷲村で行われるきりたんぼ体験には、多くの観光客が参加し、芸能人も訪れる人気の体験メニューであるそうだ。きりたんぼの由来や地域によってお米を巻きつける棒の種類が異なるなど、きりたんぼに関する知識を教えていただいた後、きりたんぼ作りが始まった。

まずは、もち米をつぶす作業から始まり、続いて木の棒へ巻きつける。木の棒へ巻きつける作業がなかなか難しかったが、みんな思い思いにきりたんぼを作ることができた。最後に炭火で焼き、おいしく頂いた。

秋田に住んでいても、きりたんぼを作る機会はほとんどなく、初めての経験であったのでよい経験をすることができたと思う。



### 妙慶寺（泉大地）

妙慶寺には真田幸村の娘、顕性院（お田の方）の墓がある。妙慶寺は寛永6年に真田家菩提のために顕性院によって建立された日蓮宗の寺である。

曾祖母に当たる瑞竜院（豊臣秀吉の姉・秀次の母）のもとに身を寄せていた顕性院（御田姫）は、大坂落城後、身を町人に紛し、難を逃れたが捕らわれの身となり、真田信之（幸村の兄）のはからいで人質として大奥へ3年間勤めた後、帰洛を許された。

その後女衆に薙刀を指南する傍ら、礼儀作法の心得をかわれ、偶然上洛した羽州佐竹家当主・佐竹義宜の給仕姫を勤めた縁で、義宜の弟佐竹宜家の側室へと迎えられた。



波瀾に富んだ運命はさらに続き、佐竹家の継嗣問題のこじれから、宜家との間に生まれた長男重隆がやがて羽州岩城家の当主を拝命、同時に顕性院（御田の方）は宜家の正室となり、親子共々亀田（岩城町）へと赴任した。

こうしてこの地で重隆を名君として育成する傍ら、夫宜家の協力を得て真田家の再興に尽力した。

現在、妙慶寺には顕性院の甲冑、薙刀、大小刀、短刀、衣桁、衣類、御膳部、調度品、等々が奉納されている。また、本堂の額には真田の門印である六文銭も見ることができる。

\*写真は上から妙慶寺境内の様子、下は真田家の墓

### 社会科巡検の感想

中嶋俊平

私たち社会科教育学研究室二次は鮎川さん、井門先生、外池先生とともに8月4日から5日に社会科巡検へと出かけた。はじめは田沢湖へと向かった。社会科巡検、記念すべき最初の行動に私たちがとったものとは……昼食である。田沢湖沿いのレストランでバイキングを食べた。ここでのごはんがおいしいことおいしいこと！ただ紅茶の味がとてもエレガントで私たちにはまだ早かったのかもしれない。この日のレストランをチョイスした大地に感謝したい。その後は田沢湖郷土資料館に行き情報収集し、釣り吉三平のクニマスのお話を讀んだあとたつこ茶屋で三浦久さんの話を聞こうと思ったが、スケジュールが順調に進みすぎたため待ち合わせまでの時間があまってしまったという問題が発生してしまった。その問題を解決するために僕たちはアヒルボートに乗った。一時は漂流しかけたが生き延びるために必死に足をこきながら魚たちに餌をあげ、無事海岸に戻ることができた。そうこうしている間に三浦さんとの待ち合わせ時間になり、たつこ茶屋へと僕らはむかった。そこでは三浦さんがクニマスについての話をパワーポイントを交えながら分かりやすくしてくれた。みんなそれぞれクニマスを秋田に戻すために自分たちにできることは何だろうか考えたと思う。そして夜、奥羽山荘に僕らは泊まった。そこは井門先生の熱い咆哮と外池先生の美声、酔っ払いどもが入り乱れるまさに戦場だった。あの日遼太郎が言ってくれた言葉は私には難しすぎて理解することができなかった。

二日目、眠い目をこすりつつ天鷲村へと向かった。ここではぜんまい織やきりたんぼ作りの体験など秋田県の伝統に触れた。ぜんまい織体験後にもらったコースターは今愛用させていただいている。その後妙慶寺などにも行き馬場為八郎も調べた。こうして僕らの初巡検は終わった。

巡検を終えての素直な感想として、準備は大変だったがとても楽しかった。ただこのままだとただの旅行になってしまう。私たちが行ったのは「社会科巡検」であり、行って学

んだことから授業を作ることが目的である。こんな有意義な時間を過ごしたのだからきっといい授業が作れると思う。いや、必ず作りたい。そしてまた巡検に行きたい。社研に入って本当に良かったと思える巡検の旅だった。